

# 教育のリズム

周 鄉 博



今日、私は教育のリズムという題で話そそうと思っていました。けれども、その問題は、考えているとだんだんむずかしくなって

きまして、自信がなくなってしましました。ぼくが、幼稚園の園長になつて、三ヶ月たちましたが、こここの幼稚園をどういうふうにしたらよいのか、今でもまだ、見当がつかないのです。

ぼくが、最初に考えたことは、国立大学の幼稚園は、まず第一に、清潔でなければいけないという気持ち。影があつて、因習によつて、悪をおかす、直接でなくとも、間接に、悪をおかしたの

ではいけないという気持ち。それから、こここの幼稚園が名前が知られている幼稚園である、長い歴史をもつてゐる幼稚園である、ということに寄つかかつて、いい気になつていたのではいけない。この幼稚園で何をやつてゐるかということは、日本の幼児たちの全体の問題に対し、歴史が古くて、名前が知られていれば知られているほど、こここの幼稚園は日本の社会に対して責任をと

らなければならないのだという、この二つの問題を中心にして懸念続けてゐるわけです。

これも漠然とした考え方ですが、ぼくは、一体、園長とは何なのか、と考えた。ぼくの友人は、「周郷さん、この頃、動物園長になつたそうじやないか」ある意味では、人間は動物ですから。少なくとも、下半身は動物ですよ。体というのは、だいたい動物と同じ性質で、できてゐる。

ただ、アポロ十一号で、行つた人などを考えてみると、あすこまでいくと、動物的なものなんかでは、行かれない。で、アポロ十一号の月着陸なんかは、ぼくは、そんなにえらいことではないと思っている。もっと重要なのは、人間の体は、動物と同じ性質をもつてできてゐるけれども、人間の心というのか、中枢というのか、もつとも今のところはだらけていて低下してしまいますけれど

も、アポロ十一号みたいに、あんなところにいて、いい気にならぬではなくて、もっと人間の中核にある、心というものは、神に近づくことができるはずなんだ。そういう問題で、ぼくはテアード・シャルダンに、非常に心酔しているわけなんです。

今度八月五日に、ヨーロッパへ行くのは、テアード・シャルダンが生まれた、オーベルニュの城に行くことが、ぼくの主な目的なのです。そういう問題をわれわれはもっているのです。けれども一方では、人間は動物である、というのは確かにことです。人間だ、人間だ、という気持ちは、特におとなというのは、生きることに慣れっこになってしまって、私は人間だ、と思っていますけれども、人間は、一面では動物ですよ。動物的なものを、人間的なものがささえているもので、動物的なものを土台にした人間的なものが、そろっていないわけだ。で、ぼくは、動物園長であるように、自分を考えることはいいことだと思うのです。それは決して子どもを軽蔑しているのではなくて、素直に子どもをみていることだ、と信じています。私も、また、動物なのです。しかし、動物であるけれども、恵みがあれば、私は、この動物の中で、神に近いものになり得るという願いをもって生きています。人間は、動物だけれども、ベルグソンが考えたようにね。

人間は、植物ととってもよく似ています。木ととっても似ています。これはインドの大昔から、宇宙は一本の木であると、ウビニシャッドは考えました。人類というのも、今、人類は、アポロ

十一号みたいに、月のところまで行つたりすると、地球というのとは、一つであるとますますみるようになりました。そして人類は一つなんであつて、そこまでくると、長い地球の歴史を通じて、人類というのは一本の木なんだ。その一本の木にいろいろな枝が生えてきましたけれども、その一本の木の先端にでた枝が、人間なんだと考える方が、自分の意見がはつきりすると思います。

私は、人間は植物と考えることが、特に、一本の木だと考えることが好きなのですけれども、子どもの時から自分を、一本の木のようを感じてきました。フレーベルが幼稚園ということを考えたのも、そういう気持ちがあつてのことだと思います。一人一人の人間が木であるように感じると、常日頃のうらみなどのようなものを感じなくて感じることができます。何か油っこく、しつこく人間の問題を考えるのではなくて、植物的にサラッとした状態で育つて、伸びてゆくものに対する感覚というものが、戻ってくるような気がします。

ところが、休みの間、土地の問題などがあつてから、私がもう一つ考えたのは、ぼくは、動物園長や植物園長ではなくて、そういう性もあるけれども、ぼくは船長なのだと思いました。船長というのは、船の中にもぐり込んでいたのではだめなんで、回りは波打っているけれども、広い海の中で自分の位置をちゃんとみつけて、どこへこの船が行くかということを考えていなければ、船長として失格です。これは、園長になったとたんから、そう思つ

ていたのですけれども、私は、こここの園長として、こここの幼稚園にかいならされた人間にはならないはずだ。ここのことをするのだけれども、しかし、広く外をみていないと、こここの幼稚園がどこへ行っていいかわからないので、そういう意味で、ぼくは、船長だ、というふうに思った。そういうふうに考えてきて、船長としても、動物園長としても、植物園長としても、私は、まだ何をやっていいのか、ほんとうのところわからない。

教育のリズムなどという題を出しておきましたけれども、この問題は、バートランド・ラッセルと友人で、それよりも早く死んでしまった、アーサー・ノース・ホワイトヘッドという人が、一九二三年にロンドンでやった講演の題なのです。この教育のリズムという題をかりて、今の日本の問題を考えようと思ったわけです。というのは、戦後の日本では、教育がどこもかしこも、何だか同じような状態になってしまって、教育に首尾一貫した生命の波というものが、消えてしまったような気がしますから。教育というのもまた、生き物ですから。

戦後の日本では、いかにもたくさん、学校や幼稚園ができたりしましてけれども、その時の、ホワイトヘッドの講演の中に出でくる言葉にもありますけれども、サハラ砂漠のように、教育というものが、無味乾燥なものになってしまった、というのが、ぼくらが、現実にもつてある問題です。こういう問題を、進化論とか、レビュリストロースのような構造主義というようなものと関

係をつけて、よく考えてみたいと思ったわけです。けれども、何だか、途中でわからなくなってしまいました。つまり、教育という問題は、非常に複雑ですからわからないのです。

教育という問題は、アポロ十一号が月へ行くよりもっとむずかしい問題ですよ。教育という問題は、人間が、外について考える問題ではないですから。人間が外について、つまり、自然や何かを理解すると同時に、人間が、人間自身の成長する姿を理解しなくてはいけないのでからね。たいへんむずかしく、複雑な問題なのだ。岡先生がいつていてるように、教育という問題を、戦後、いかにも簡単なように考えていることが、日本の不幸なのですから。教育というのは、きわめて複雑な問題であって、人間自身について考える問題です。そして、人間がどこへ行くかといふ、人間が、どういう運命を背負っていて、その運命は、どういう形で、より高い次元のものとして価値をもちうるかという、そういう問題ですから。教育の問題は、現代の世界の状態でいえば、世界の人類にとって、将来、人間がこれで滅びてしまうのか、人間は、次のいい時代に入ることができるか、という分かれ目のかぎを握っているものが教育なので、考えれば考えるほど、それはむずかしいものです。

最初にホワイトヘッドが、どういふことを考えたか、という

を言います。アーサー・ノース・ホワイトヘッドは、数学者です。数学者というのは、構造主義者と同じように、自分の都合とか、自分の私欲とかでは物を考えることのできない種類の人間です。

簡単に言うと、教育というのは、三つの段階でできている。第一は、romance ローマンスの段階。romance というのは、簡単にいうと、物語の段階であります。それは、こまかく、個々のことについて調べる、ということではない。全体ということが、わかつている状態、全体を想像している状態です。二番目に入るのには、stage of precision で、個々のこまかい問題を確かめていくところが段階。三番目に今度は、全体を総合して、自分の考えが生まれてくる。そういう三つの段階を総合して、自分の考えが生まれてくると、ホワイトヘッドは、考えたわけです。

だから、普通で考えると、小学校の二年か三年ぐらいから、これは、stage of precision というものになるわけです。個々の知識を確かに自分のものとして、訓練して身につける。それから、十五歳になつて、しかし、あるものは、ホワイトヘッドは、科学というのは、十二歳ぐらいから、stage of romance という状態に入るんだ、という。そして、個々の問題を確かめて、大学の段階にきたら、それが総合されて、その人だけの独特的の考え方方ができるようになるのが、stage of generalization だ。<sup>24</sup> stage of generalization つまり、総合の段階というのは、十五歳以後にはじま

りますけれども、これは青年期以後に、すべての人が負っている考え方です。すべての人が自分の考えを、人生観も、学問についても、自分の考えを今までのことを総合して、そこではつきりとつかまなくてはならぬという段階がくるわけです。

で、stage of romance というのは、幼児期の段階であり、幼児期から小学校低学年ぐらいまでの問題なのである。簡単に幼児期といつてしまつてもいいけれども、ある問題については、stage of romance、つまり、物語のように、真理がはつきりみえてこないけれども、全体が、半ばみえてきた、という真理についての驚きを感じる時期があるわけだね。だから、幼児期と簡単にいつてしまつていいかどうかはわからない。

ところで、ホワイトヘッドの教育のリズムという三つの段階が、今の日本はどうなつていてるかと考えてみると。——stage of precision、つまり、個々の断片的な知識というものは、小学校の半ば頃から中学のはじめ頃にかけて訓練してやっていかなくてはいけない。つまり、知識ですからね。これは、やつていかなければいけないのでですが、戦後の日本の教育は、社会が非常に速く変わる、社会の変わり方が、急速でありすぎたので、人間の心は、一種の真空ができた状態です。日本の教育は、何か新しいことを詰め込むというしかたです。民主主義なんかというものの、これは、單に、知識です。stage of romance という、民主主義というものは、一体何なのか。形ははっきりしないけれども、一つ

の発酵状態として、人間が、いかに生きるかということを、漠然と感じるという段階なしに、単に、precision、単に、断片的な知識として、民主主義というものが入ってきましたね。日本の教育は、試験勉強というものも、ここに入りますけれども、何か断片的な知識で、しかも、そこで結論になってしまったような知識、それが、日本の教育を全部、荒してしまったのではないか、といふ気がする。

stage of romance といふところでは、つまり、幼児の時期は、stage of precision であつてはいけないわけですね。ふんわりした、人間の、生きていく姿というものがわかつてくると、自然の美しさというものが、文学的にわかつてくると、文学的に、あるいは詩的にでもいいのですけれども、この世の姿が美しいものとして、個々に分解してみるのではなくて、全体の姿がわかつてくる喜びと驚きが、ここで、最初になければいけないのだ。そして、次の段階に、花なら花、虫なら虫、物質なら物質、個々の構造について、詳しく知るという段階がきて、そして、今度、青年期に入って、今までのこと全体を総合して、自分の考え方がしつかりしたものになってくるという、三つの段階を経るのが、人間の成長の三つの周期なんだ、というのがホワイトヘッドの考え方です。

だから、現代の日本の社会と教育は、個々の、切れ切れの、何ら全体として意味をもたない知識を覚えるということが、教育全

体となってしまって、従つて、大学生になつても、自分自身の責任をもつた世界観、ものの考え方、というものができないわけですよ。そして、この教育のリズムの混乱状態というのは、幼児たちの生活にも、押し込んでしまっている。つまり、stage of precision といふものを省いてしまって、家族というもの、これも変わつていかなくてはいけないのですけれども、しかし、家族が、どう変わつていくかということについて見当がつかないのでも、漫然と、変わらされている状態です。家庭は、科学や、技術の進歩によって、切り刻まれて、何か、家庭独特のロマンティックなふんい気が、なくなってきている状態ですよね。

子どもの絵もそうでしょう。最初の段階、小学校の二年ぐらいまでの時には、子どもは、ロマンスの段階として、全体をつかんでいる。非常に味わいのある絵になるはずですね。小学校の二年ぐらいうから、五年ぐらいうになると、これは、試験勉強だけのせいじゃないのだけれど、描かれる絵の、非常に複雑な部分について知ることになるわけです。従つて、絵のおもしろ味が、そこでちよつと落ちるわけです。そして、generalization 総合の段階といふところにきて、初めて、その子ども独特の非常に複雑なものを総合した、一つの世界観としての絵ができるのです。

今、いひで言いたいのは、stage of romance といふものだね。個々の知識を確かめていく。いじばの問題でいうと、最初に

stage of romance というものがきますね。子どもは、何だかよくわからないけれども、おとなが使っていることばを覚え込んでしまうのだ。これは理屈で説明して、こうだからこういうふうに考えなさい、というのではなくて、物語として、これを覚えてしまってのだね。

ピアジェは自己中心というものを最初に考えた人です。しかし、自己中心というのは、聖書にでてくる一粒の麦のようなものですよ。この一粒の麦が、このままでいたら、おしまいなのだけれども、この麦が、だんだんわってきて、だんだん大きくなつていく状態が、ego が、自己中心がこわれていく状態、自己中心が成長していく状態なのです。この自己中心を成長させる役割りをしている、つまり、自分が分化していく、一つの種が成長していく刺激になるのが、物語だとピアジェは言っているわけです。それも、romance の段階の重要なもののです。実際、今の子どもたちには、物語というものがなくなつてきているよう思いますが、保母さんたちも、あんまり物語らなくなつて、心理学の特殊用語をちょっと覚え込んでいて、それだけで間に合わせるように考へる。自分のロマンティックな、まだ、はつきりと説明がつかないけれども、全体についての自分の感じ方の中から生まれてきただ見方があるわけだね。そういうようなのが物語の時代なのだけれども。

ところで、私が、今いおうとしているのは、教育というのは、

あなたがたは、私たちは、幼稚教育を分担しているんだ、分業でやつているのだ、というかもしれないけれども、分業が成り立つためには、全体の見通しがなければ、分業に意味がでこない。うつかりしていれば、何をやつているのかわからないことをやつしているわけだね。つまり、全体はどうなつていて、と全体についての見通しがあってこそ、分業は、成り立つわけです。そこで、私が、いおうとしているのは、現在の教育の中で、ホワイトヘッドが、romance の段階の教育といつてることが、どんどん他の機械的で、人間の欲にからんだ、個人的利益にくつついた教育となつてあらわれ、それが、知識の教育だ、と思われているのだ。何でも知識をもつていれば、人に勝てるという迷信みたいなものがあつて、それで、私は、そういうのとはちがうので、まじまじとしている人間だ、と、さつきから言っているのです。

私が、いおうとしていることは、幼稚期というものは romance つまり、物語の時代なんで、知識の時代ではないのだということ。そして、そのところが、どんどんだめになつてしまえば、それからあとの教育は、全部だめになつてしまふ、といおうとして、今、こういう問題をいつているのです。

今、ここにもつてきた本は、寺田寅彦が昭和四年にかいたものです。寺田寅彦は、物理学者で、同時に文学者です。ホワイトヘッドという数学学者も、同時に、文学者なのです。つまり、科学者

の方が、文学というものに対して、非常に深い関心をもつてているのだね。で、科学について、素人の人が、科学を迷信しているのです。科学者になるためには、人間は、一つの憧れをもたなければならぬ。寺田寅彦が、昭和四年に、化物についての非常におもしろい文章を書いた。そのことをお話ししたいのです。

stage of romance、これは、精神が発酵して、何かを求めている状態になるというのが romance の段階なんだね。発酵しないものは、後のためなのだから。今の人間は、そもそも、子どもの時から、人間として発酵してないんだね。つまり、何か求めている状態がなくて、求めているものは、単に、世界にある刺激と、物質的な享楽なんだね。これは、非常に危険ですよ。そういう意味では、romance の段階にある幼児期、あるいは、その後にも来るのですけれども、何か、ほんとうにその気になって、自分一人で、やっていくという状態になる前に、真理というものを求め心が、発酵していくという状態が起こらなければ、その後の教育は、やりようがない。

もつと、普通の言葉で言えば、イギリスなんかでも、そういう言葉が非常にはやっていますけれども、一体、子どもたちは、生まれてきたんだけれども、十九世紀や、その前の時代にくらべて、勉強する気がないのではないか、ということ。幼児の時代に、romance の時代に、真理というものが、わかつてしまつたら、しようがないわけでしょう。幼児の時代に、非常に大きな真

理があるのだということ。それを知りたい、あるいは、それを、美という言葉で言つてしまつてもいいのですけれども、非常に、宇宙の美しさがあるということ。それは、真理というもので、そして、その大きな宇宙の運動、あるいは、自然の美というものの中に自分がいるということに驚きを感じる、というのが、romance の段階で、そこで、精神と肉体は、一つの発酵状態を経験するわけです。そういう段階を経ないで、知識の教育が行なわれるということになると、その知識の教育は、個々のもので、その知識全体の関係がついてこない。意味をもつてこない知識、つまり、教育によって、精神はたるんでしまう、退屈した状態になってしまふものだ、というのが、ホワイトヘッドの見方なのです。

寺田さんの化物の進化、これは長い文章ですけれども、人間文化の進化の道程において、発明され、創作された、いろいろの作品の中でも、化物などは、最もすぐれた傑作といわなければならぬ。化物も、やはり、人間と自然の接触から生まれた正嫡子であつて、その出入りする世界は、一面には宗教の世界であり、また、一面には科学の世界である。同時にまた、美術の世界でもある。で、最初に、こういう化物の世界があるのだと思う。ところが、今は、おとなでも化物なんていうものを、（ほんとうは、おとな自身が、今、化物になつてゐるのだけれどもね）自分では気がつかないのだけれども。

化物の世界、これは、坪田譲治の童話の世界なんかは、化物の

世界なのです。そういう化物の世界というのは、寺田さんによる  
と、人間が創造した傑作なんだね。これは奇蹟ということばでい  
つてもいい。ところが、ぼくらは、今、不思議なものは、全部な  
いように思い込んでしまっている。そして、寺田さんは、各民族  
にはいろいろな化物があり、つまり、いわゆる科学的には、説明  
のつかない物語がありますね。各民族の化物には、民族の宗教と  
科学と芸術とが総合されているんだ。それは、民族の romance  
の段階で、民族が作り上げたものだね。その民族がまだ、子ども  
のように素直で、無邪気で、この自然界にある。あるいは、この  
自然界と人間の世界が作りあげている不思議な状態について描き  
出した物語ですよね。そして、寺田さんは、科学教育が非常に重  
要だ、といっている。科学者になるにも、芸術家になるにも、そ  
れから、宗教家になるにも必要だ、といっている。

ところが、今の子どものことを考えて、うらんなさい。今の子ども  
たちが、何にでも、すべて割切るという状態になってしまって  
います。あれは、子どもではないと思う。あれは、小さな、生き  
ていてもあまり意味のないおとなどと思う。

化物教育。つまり、化物というと、わからぬことがあるわけ  
でしょ。わからないことがいろいろあって、不思議で、これが  
一つの物語になっている。わからぬものがあると、この不思議  
なものの中に、自分が生きている驚きが、人間が人間になるため  
に必要なんだね。で、寺田さんは、このような化物教育は、少年

時代のわれわれの科学知識に対する興味を疎外しなかつたばかり  
でなく、かえってむしろ、ますますそれを鼓吹したように思われ  
る。これは、一見、奇妙なようでもあるが、よく考えてみると、  
むしろ当然のことである。皮肉なようであるが、われわれには  
んどうの科学教育を与えたものは、数々の立派な中等教育より  
は、むしろ、長屋の十兵衛さんと友人のNであったかもしだ  
い。これは、必ずしも、無用のへんちき論ではない。

つまり、常識では、はかりがたい世界というものがあるわけで  
す。子どもたちは、最初に、現代ならこの現代という時代では、  
この常識では説明することのできない大きな世界に驚かなければ  
いけないのだね。もっと後の方で、寺田さんは、こう書いていま  
すけれども、化物がないと思うのは、かえって、ほんとうの迷信  
である。ここが非常に重要だと思う。何かわかっているとみんな  
思うけれど、そうわかつちゃいないのですよ。わかっていると思  
うことと、人間は、自己満足しているだけで、わかつてないわけ  
です。宇宙は、永久に懷疑にみちていますよね。寺田さんがいう  
ように。

だから、ぼくは、アポロ十一号の月着陸というのは、あれはい  
かにも説明がついちゃっておもしろくない。もっと宇宙は、神秘  
ですよ。ぼくは、月に行つたということは、月と地球の関係を考  
えることの方が重要なのだと思うのだ。この太陽系の惑星のうち  
で、地球の衛星である月は、最も大きな衛星なのですから。あれ

が大きかったので、地球の潮の満干なんかも、非常にいい具合に起こって、地球に生命が育つのに、あの死んだ月が役に立っているのだ。つまり、死んだお母さんみたいになっちゃうのだけどね。

文学の中には、そういうふうにでてくるよね。あの小川未明の童話で、お母さんが死んじゃって、お月さまをみると、死んだお母さんがあそこにいるというふうにでてくる物語がありますけれども。あれは、生命がないように、あそこに死んでいるわけです。が、あの死んだようにみえる月が、地球のそばにあったので、地球の生命は、いい条件で育ったのではないかと思うのだね。

人間という生物は、一体、この全体の宇宙の中でどういう役割を負っているものであるか、と感じる方が、もっと宇宙の神祕といふことがわかります。そしてその方がもっと重要なことです。

寺田さんは、普通の人は、科学がなんでも説明できるようになっていますが、それは、間違いなので、化物がないと思うのは、かえってほんとうの迷信である。そして宇宙は、永久に懷疑に満ちている。それを、ひもといて、懷疑に戦慄する心持ちはなくなれば、科学は、もう、死んでしまうのである、といっています。

われわれは、今、地球はもつと一つになるものであり、そして、大きな宇宙の中で、地球の人類がどういうところで進化していくかなければならないかと考えてみると、そういう運命を担っているのが、今の幼い子どもたちなのです。そうしてみれば、幼児の時期に、ただの化物でいいわけではないのだが、非常に大き

な宇宙を含めた人間が、生きてきたこれまでの過去と、現在生きている人間の世界では、非常に大きな不思議なものがあるという事に驚く心がなければ、つまり、そういう発酵が起らなければ、知識の教育は意味をもつてこないわけです。

寺田さんが、もう一つその前に書いているのは、非常に短い文章で、名文なんだけれども、これも、ぼくは、romance の段階において、子どもがやらなければならないものだと思うのです。romance の段階というけれども、アーノルド・トインビーの「現代のようになつてしまふと、教育は、一回で、教育は大学を卒業すれば、それで間に合うような時代でなくなってきた。教育は、一度ですむではなくて、生涯通じて、何度も、教育をしなければならない。何度も教育を受けるということが、これからのお教育の姿だろう。一度大学を出ておけば間に合つたというのではなく、また、幼児たちと同じように、romance の段階をとなたちも、おもたななければなりません。

非常に安値に、人から借りた真理で、人から借りた知識で、全部わかつた、こんな気がしてはいけないのだね。非常に大きなものと、現代の人間は、とりくんでいるはずですよ。大きな真理という不思議なものがある。真理の大海上にある。それに驚いて、謙遜にならなければいけないので、その意味では、聖書の中に予言されているように、「幼子の」とくならずば、天国の門は、開か

れない」ということは、現代のすべての人があもつてゐる宿題なんだと思う。おとなたちは、子どもたちの本来の姿を、一方では、こわしています。そして、おとなたち自身が、すくいのない状態になつてゐる。

その意味では、寺田さんの短い文章は、ぼくは、前から好きで、これは、大正九年に書いたものです。おとなたちも、こういふ気持ちをもつていなければいけないので、それで、子どもたちも同じように、こういふ気持ちでいなければいけないのだと思うのです。日常生活の世界と詩歌の世界というのが、この名なんです。ぼくは、この考えは、今、ヨーロッパでよくいわれている、非常に大きな問題になつてゐる構造主義という考え方と、一つ共通していると思います。これは、言語の問題です。言葉とか、イメージとかいう問題の重要さ、人間が自然を見る、世界を見る、それから、いろいろなことを解釈する場合に、人間の中で生まれてくる言葉と論理とは、一体、なんだろうという問題につながるわけです。

寺田さんは、この詩歌の世界というのが科学の世界の土台になるのだといつています。詩歌の世界というものがなければ、科学というものには、ならないわけです。つまり、非常に大きな真理の前に驚いて、これを求めるという気持ち、発酵状態が起ころない限り、ほんとうの科学は生まれないわけです。

寺田さんは、「日常生活の世界と詩歌の世界の境目は、ただ一

枚のガラス板で仕切られている。一枚のガラス板は、初めからくもつてゐることもある」つまり、食つて、着て、安らかに死んでいく、これ以上何も知らない人もいますよね。しかし、これは、動物としては、非常に美しいけれども人間としては、あまり美しい。このガラス板は、はじめからくもつてゐることもある。生活の世界が塵に汚れてくもつてゐることもある。生活の世界つまり、肉体的生存の世界。人が、ぼくは、今、非常に汚れていると思いますよね。そうすると、日常生活の世界と詩歌の世界つまり、真理とか科学の世界とくぎつている一枚のガラス板があるのですけれども、このガラス板が初めてくもつてゐることがある。これは、生活の世界の塵に汚れてくもつてゐることかもしれない。

つまり、あんまり欲が深くて、自分のことばかり考へてゐるところ、ガラス板はくもつて、ガラスの向こうは見えない。この二つの世界の間の通路としては、通例、小さな穴があいているだけである。しかし、じじゅう、二つの世界に出入りしていると、その穴はだんだん大きくなる。これは、詩歌の世界がわかる、つまり、象徴の世界がわかるのだね。言葉でつかんでいる世界がわかるのだね。不思議な大きな世界が、このガラス板のむこうの、それは、宗教の世界もあるし、科学の世界もあるのだよ。そこで、ぼくは、教育というのは、幼い時に、この穴を出入りさせることを覚えさせることだと思うのだ。アイスクリームを食

つてはいる時だけが、幸せだというのではね。今、そういうふうになりつつあるのですよ。テレビをみている時だけ、生きている感じがして、それをみ終わったら、だらんとしゃがんでいる。ほとんど怪物に近い状態になつていていたのだ。しかし、しじゅう、二つの世界に出入りしていると、この穴もだんだん大きくなる、しか

し、この穴は、しばしば出入りしないでいると、自然にだんだん狭くなる。ここへ出入りしなければいけないのですよ。人間は、詩歌の世界なのだ。そして、これは、真理の世界なんだ。言葉といふ、あるいは数学の符号という、不思議な人間だけがもつていふ象徴をつかって、無限の世界というのに入りしなければならない。無限といつてもいいし、宇宙といつてもいい。われわれの過去というのも、われわれにとっては、不思議な世界ですよ。どこまで、五億年昔まで、ずっと続いている地球の過去がある。無限の世界だよ。ここに出入りしなくてはいけないのだから。

ある人は、初めから、この穴の存在を知らないか、知つていても、別に探そともしない。これこそ、ほんとうに暢氣だ。これは、もう何だか、食つて、飲んでいる時に、非常に気嫌がよくて、まあ、そういう人もいい。それは、ガラスがくもつていて、反対側が見えないためか、あるいは、あまりに忙しいために。だから、あんまり忙しくてはいけないのでよ。ぼくは、あんまり事務的じやないから、ガラスのむこうにいる時が一番気持ちがいい。あんまり人がくると、こっち側にいなくちゃならない

からね。やつぱり、一枚のガラス板の向こう側を見れるという時が、ぼくにとって一番気持ちがいい。つまり詩が書けそうになっている状態。真理というものが、みえてきそうになっている状態というのが、ぼくにとって、興奮するいい状態なのです。

だから、あんまり忙しいと、これが見えなくなっちゃう。だから、教師たちは、あんまり忙しくてはいけないので。さぼつていなさいということではないんだ。それは、パートランド・ラッセルがいっている idle ということなんだね。忙しいということ、ラッセルは、idle と lazy という、二つの言葉を使つてゐるわけですが、両方を日本語に訳すと、怠けるということになる。idle というのは、悪を犯すということを伸ばしてはいるということなのだね。何でも、早くやつてしまえばいいというのではないのだね。それが idle ということで、idle こそ、人間のいい性質なんですね。というのは、体に何の気力もなくて、怠けるということなんだ。lazy では人はいけないけれども、人間の人間たるゆえんは、idle などにある。何でもすぐに、やつてしまえばいいと、いうのではない。おそらく、ラッセルの idle というのは、忙しくしてはいるということではなくて、考えながら生きている、つまり、イギリス人特有の、歩きながら考えるという状態です。

「穴をみつけても通れない人がある。それは、あまりに体が太

りすぎているために」ここで寺田さんが言っているのは、あまり体が太りすぎているという言葉で言っているのは、ごく慢でありすぎるから、ということだ。体が太っているだけではなく、人の考え方なども、受けつけないのだね。そういう人がいますよ。しかし、人の考え方をも、受けつけなくなったら、その人は枯木ですよ。人の考えもわかるということが生命もまた、若いということだ。しかし、そんな人も、病気をしたり、貧乏をしたりして、やせたために、通りぬけられるようになることがある。そこで、やつぱり、病気をしたり、貧乏したりすると、空をみて、空がきれいにみえてくる。非常な不幸を経験すると、寂しいということが、わかってくる。木の葉のそよぎなんかも、前なんかとはちがつて、きれいに見える。雑草の花なんかも、きれいにみえてきます。それは、ガラス板のむこうの世界に入りきることができるようになつたからです。

そして、最後に寺田さんは、「まれに、きわめてまれに、天の炎を取つてきて、教会のガラス板をすっかりとかしてしまう人」これは天才のことですよ。つまり、ガラス板をすっかりとかしてしまうのだね。シェークスピアみたいな人だね。ピタゴラスみたいな人だね。AIN-SHY-TAINEみたいな人です。そういう人がいるので、われわれは、人間らしいものをもつてゐるわけだけれども。全部が、ガラス板のこっち側ばかりにいるのだったら、もう、人間は、けんかばかりしていって滅びてしまうにちがいない。

各を越えた、大きな真理があつて、その真理の世界に出入りし、美の世界があつて、これに出入りしている。このガラス板の向こうへ、行つたり、來たりしている人がいるわけだね。そういう人がいるから、わたしたちは、人間としてもつてゐるんだね。皆、こっち側で、欲のために自分ばかり主張していたら、人間は滅びてしまうだろう。

こういうお化の世界。それから、寺田さんがあとで言つた、一枚のガラス板の向こう、つまり、詩歌の世界と物語の世界と、日常生活の世界を出入りすることができるようになることが、教育の仕事であつて、これは、幼児の時代だと、これは、物語の時代なので、真理というのを、冷たい知識として教える時代ではない。お化の世界、一枚のガラス板の向こうの世界、(これ、不思議な世界ですよね) いうものを、寺田さんは、人間の心が成長するのに、非常に重要な役割をしているといつてゐるのです。

そのお化の世界みたいなものを、まず、言おうと思つてゐるのですが、このお茶の水大学の、外山滋比古君が、修辞的残像といふ本の中で、やはり、それと同じ問題を出しています。それは、童話の世界というのです。この童話の世界というのは、つまり、神話でもいいのですが、これは、人間が、この世に生まれてきて、はじめて聞く話なんだね。それは、今の子どもたちは、毎日の生活が、ある意味では退屈しているし、ある意味では、不安な

のだ。その中で、子どもたちに、与えられている物語には、非常に

だ。坪田さんの谷間の池の書き出し。

に刺激的な物語が多いのですけれども。しかし、外山さんが言っているように、童話という、つまり、お化の世界みたいに、「昔々、あるところに」という、つまり、今日、ここにあったというようなことではなくて、どこにでもあったような、時間と空間を越えた一つの物語の世界というのが、ここで、できるわけだね。

そういう物語の世界というのは、いろいろな小説、その他の、おとなたちが今、かいているものの原型になっているもので、物語のうちで、最もすわりのいい物語だといっているんだ。それは、変わっていくものの中で、変わらないすわりのよさをもつてている物語なのだ。で、それを外山さんは、こまをまわした時の、こまが非常にすんだ状態でまわっている時の中心部みたいなものが、童話なんで、それは、すわりのよさをもつてているといっている。そういうものが、幼児の時代に、romance の段階として、与えられなければならないのだ。

「今から、四十年も昔、明治の頃の話であります。ある夏の日の朝早く、岡山の町から三キロばかり離れた、草深い田舎の田んぼ道を、おじいさんと子どもが歩いておりました。おじいさんはさおをかつき、子どもはかごをさげておりました。二人は、これから、山のかなたの谷間の池に、鯉やふなをつりに行くところであります。さて、道が二つに別れているところにきました。すると、さきに立っていた子どもが聞きました。おじいさん、どっちに行くならな。おじいさんが言いました。さて、こういう時こそ、おじいさんおばあさんをやってみにゃならん。そうじゃろうがといって、二つの道を指でさし、じいさんばあさん、どっちの道にしようかなあ。そりや、われのかってにしゃらんせいといいました。すると、指は右の方にとまりました」

この後の方は、どっちでもいいのですけれども、この書き出しのところで、何行か、ずっと読むと、大きな自然の世界が、ずっと浮かんできますね。ここに、おじいさんと子どもがいつしょに歩いているというね。すべてのものを含んだ自然というのが、バッタと浮かんでくるというようなものが、今の子どもたちにはなくね、ここで、スレット世界が浮んできますよね。とにかく、自然の中に、ちゃんと人間がいるという状態がでてきます。で、ぼくは、いい例がみつかないから、これをもってきたのですけれ

ど。この問題は、この問題でたいへんおもしろいのですが、私は坪田譲治の童話の中に、まだそういうものが残っていたように思います。坪田さんの谷間の池というのを、はじめの方ちょっと読むとね、ここで、スレット世界が浮んできますよね。とにかく、自然の中に、ちゃんと人間がいるという状態がでてきます。で、ぼくは、いい例がみつかないから、これをもってきたのですけれ

よ。それは、個々のこととを説明しているのではないのだ。こゝに、全体の美しさが、パッと現われるというものだ。それが、*romance* の時代にふさわしいものなのです。

そういうことを、外山滋比古さんの童話の世界というのも、かなり、お化の世界、童話の世界がもつてている人間の成長のために、最も必要な、だんだん成長するに従って、個々のもの、変化する部分と、いうのは、もつてきますけれども、すわりのいい中心部というの、なればならない、ということを追求しているわけです。

はじめに、むずかしくて、あまりうまく話ができそうにない、と

いいましたが、ぼくが話していることがぼくにもうよく言えないのです。生物学の柳田さんと、ソニーで夏、講習会をやると、保母さんたちが集まつてくる、あのふんい気は、独特なふんい氣で、あれは、女というものがもつていて、不思議な力なんだ、と、話しあいましたが、ぼくは、つい分前に、保母さんがたくさん集まつた時に、やっぱり、女というものが、生命を育てるということに、独特な感受性をもつていると感じました。それから、実行力をもつていて、これは、説明のつかない、神秘力なんだね。

今、敗戦後二十三年間、日本は単に、物質的に豊かになつた。日本の歴史の中で、これほど、日本人が物質的なものにおぼれこ

んでいる時代はないと思います。こういう、間違った道を歩いてしまっているので、何とも説明がつかないけれども、皆さんには、日本の児童たちの中に、日本の輝くような未来を感じようとしているのだという感じが、ぼくには、前からある。

私は、園長として、ここに四年おりますけれども、四年間の間に、皆さんといっしょに、つまり、日本の社会がどうなっていくかということ、つまり、小さい子どもたちの問題を、ほんとうに考えていくことによって、日本の道が見つけ出されるというふうにやっていきたいと思います。そういうことで、ぼくがやれるだけのことをやってみたいと、考えているので、協力していきたい

と思います。

また、大學の教師としては、テアード・シャルダンのよう、現代の非常に大きな問題を提起している人の考え方を勉強して、つまり、考えというのは、その人の人柄と別個のものではありますからね。そういうことや、構造主義という、つまり、人類の今までの歴史を全部ひつくるめてみて、文明社会の人間よりも、原始的な生活をしていた過去の人たちや、未開人たちの方が、人間として、はるかにいいものをもっているという、そういうのが構造主義の考え方で、同時に、その中には、人間が考えるといふ、あるいは、人間がもっている言葉というのは自分ではどうにもならない大地との関係の中で生まれているものだという、つまり、考へるといふけれども、それは、思い出すということと、ほとん

ど似ているものだということ。

外から知識を与えるよりも、昨日久保君が、子どもたちに自信をもたせるといいましたけれども、つまり、自信をもたせるということは、どういうことか。自信というのは、ファイトをもつていうことだけではないんだね。ぼくは、自信をもつていうのは、人間として、生まれた運命を素直に承認するということ、つまり、生きるという覚悟をちゃんとしてしまうことなのですけれども、それが自信をもつことです。子どもたちが、ほんとうに絵をかいている状態の時には、顔がよくなりますね。それが、自信をもった状態なので、その時には、小さな我なんかで行動しているのではないんだ。しかし、その人が生きていることに対してほんとうに責任をとっている状態ですね。それが、久保君がいってい る自信をもった状態なので、この自信をもった状態になるということは、非常にたいへんなことなのだ。

そして今、現在の教育は、それと逆のことをやっているわけで、シモース・ベイユが言つたように、資本主義の社会というものは、すべてが受動的でつまり、食わしてもらっているという状態ですよね。食わしてもらっている、つまり、自分がこの世界に對して、責任をとっている状態ではないんだ。その中で、うまく泳ぐという受動性なんですよ。つまり、すべて受け身で生きているのですけれども、そして、同時に、シモースが言つているように、現代の社会は、受動性と無方向という特徴をもっている。ど

こへ行ってよいか、わからない。

つまり、どこへ行っていいか、わからないことは、皆さん、折りにふれて感じているだらうと思います。一体、人間は、これでいいのかという、にもかかわらず、その中で、受動的に、自分は、何もできないんだ、という、そういう状態では、人間はずるくなるより仕方ないわけです。こういう状態の中で、資本主義は、つまり、自由主義といつてもいいのだけれど、この自由主義で、資本主義の社会というのは、受動性と無方向だよ。つまり、主体性をもって、自分が生きていることを実行しているわけではないんだね。そして、その中ではシモースが言つているように、権利の主張という、フランス革命以後の迷信が必要以上にいわれている。

シモースは、すべての人たちが、これは、ロンドンで餓死をする前に書いた文章なのですけれども、自分の権利を主張するという、フランス革命以後の生き方をしている限り、この自由主義と資本主義の社会では、その権利の主張によって、人間は何も与えることがなくて、それは、際限のない闘争である。

教育というのは、そういう、自分が有利な位置につくための闘争ということに、もみくちゃにされている状態ですよ。現在は、同じ程度に、人間が各人、もつて生まれてきた人間性を破壊しているわけです。シモース・ベイユは、デラシネという、つまり、

人間の根が切れた状態といつていますが、それはどういう理由で、人間が、根が切れた状態になってしまったのかというのを三つあげています。つまり、根が切れた状態で、自分のことがわからぬ。これは、枯れた木ですからね。根がついてない。われわれ、民族とか、人類には、根がついているはずです。その非常に深い所から、エネルギーがわき出してくれるはずです。そういうものが、もう根から水を吸い上げてはいない、という、枯れた状態になっています。

で、シモースがあげているのは、その当時のフランスのことをいつているわけです。

第一は、日本に、ピッタリあうような気がします。人間が、根こぎの状態になっている、ということは、一人の人間の中に、人類の跡を受け継いでいるという责任感がない。人類が、ずっとここまで来たという、キラキラしたものを受け継いでいるという責任がない。そういう根こぎの状態というのは、まず、第一は、軍事的事的な占領によって、人間は根こぎの状態になった。フランスが、ヒットラーの軍隊に占領されていた時に、それはかいたものですけれどね。ロンドンの郊外で、餓え死をする前に、かいたものです。しかし、日本も、アメリカの占領という結果、自分でも意識しないうちに、われわれが、根こぎになってしまっている。誇りをもつて、生きているという顔には、出つくわさなくなりました。從

つて、おとながそなだから、シモースがいっているように、根が切れた人は、他の人の根をも切つてしまふものだと。

デラシネ (déraciné)、デラシヌマンという、つまり、根こぎにされた人間は、他の人をも、根こぎにするという、人間と人間の関係が、日本にも生まれてきているわけですよ。われわれは、日本民族を通じて、人類につながつていてるですからね。そして、人類から受け継いでいる。簡単には、さびない、シモースが言つてゐるような、黄金のあずかり物を、みんなが、もつてゐるはずですよ。そして、今、出口のない状態に、新しい出口を作ることを、われわれは、課題にもつてゐるわけだ。第一は、軍事的占領によって、人間は、根こぎにされる。だから、チヨコマカしながら、いろいろなへ理屈をいって、自分のことしか考えない人間というものになつてきているんだ。日本民族に対して、責任をもつて、生きているという実感は、どうしたって起こらないだろうと思うのです。しかし、それがなければ、そこに根がつかなければ、木は伸びていかないはずですよ。木は、花を咲かせないはずです。

ぼくらはやはり、こういう感じがするね。桜の木を、よく枝を切つてしまふと、ぐじゃぐじゃっと生えてしまって、花が咲かない枝ができるね。日本人であるといながら、あの桜の木の花は咲かない。ただ、ぐじゃぐじゃと、量的に茂つていて、ああい木のような感じがします。すつきりしてこない。

第二に、シモースがあげているのは、お金というものが、人間を根こぎにするものだ。お金がすべての問題を解決するというような所では、すべて、そこで、人間は、根こぎにされてしまうと、いうことも、ぼくは、確かにと思うし、それが、現実の日本のような気がします。お金では、買えないものがあるという実感が、われわれになれば、人間は、根こぎになってしまふだろうと思うのです。ところが、現在の日本の状態では、お金が勢力をふるっていますよ。ぼくは、テアード・シャルダンみたいに、お金というものは、血液である、と考えたいと思います。これは、全体の生きものである民族とか人類の体内を回つて歩くべきもので、一ヶ所に血液がとまつていれば、その民族は滅びますよ。これは、社会主義などという概念ではないんだ。實際、子どもも、子どものがい時代は、お金がすべてを解決するのではないと考えているはずですよ。おとなたちからみて、實に、立派だと思います。だけど、それはある年齢になると、お金の奴隸になつてしまふわけです。それは、おとなたちが、お金の奴隸だからです。

第三番目に、人間がなぜ、根を切られた、なつかしさのない人間になつてしまふか。意味のない人間になつてしまふかという第三の問題としてあげているのは、現代の教育によつて、人間は根こぎにされる。つまり、小さな穴を、日本人がよく使う言葉でい

えば、重箱の隅をつつくような知識の習得ばかりやつてゐる現代の、そして、もう一つ、プラグマティズムの色彩がとても強い、つまり、実用、すぐ明日、役に立つという振幅の狭いことばかりやつてゐる教育によつて、人間は、根を切られた人間になつてしまふというふうに、シモースが言つてゐる。これは、フランスについていっているのではなくて、全世界について、言つてゐるのです。そして、特に、日本の戦後の状態にピッタリ合つてゐるような気がします。確かに、日本人は、根こぎにされている。根がついて、育つてゐる木のような感じはなくなりましたよね。たまに、教養も何もないおばさんが、いかにも根がついているように見えることがあります。

そこで、ぼくは、ハーバート・リードが言つてゐるように、イギリスでも、知識人といふのは、全部といつていくくらいオポチュニスト、つまり、日和見主義者になつてゐる、という見方がありますよね。何か、少しぐらい知識をもつてゐる人は、現代において、非常に日和見主義者で、その時の、つまり、たいせい便乗主義者で、ほんとうに責任をとつて考へてゐる人ではなくて、そういう意味では、ぼくは、いわゆる知識人といふものに對して、すべての人は、疑問をもつべきだと思う。もっと、田舎にいる、何にも知らないおばさんみたいな人の方が、つまり、romanceをもつてゐますね。反対に、割り切つて、わかつてゐるというふりをしない人がいますね。魅力のある人です。

私は、孟子のことを思い出しました。孟子というのは、ほんとうの教育者のような気がする。愚かな宋人というたとえがあるでしょう。「ある愚かな宋人が、今日は、稻に早く花を咲かせるために、田んぼに行つて、稻を一本一本ひっぱつて帰つてきたんで、すっかりくたびれた、といつて家に帰つてきた。朝から晩まで、ひっぱつて歩いたんだろうね。今日は、稻を育てるのに、非常にいつしきょうけんめいで、くたびれちゃつたといつて、家へ帰つてきたんで、田んぼがどういうふうになつてゐるかと思つてみたら、全部枯れていた」というのだね。

だから、教育は、そこばかりみてやつていてはいけないんだ、というのが孟子の考え方で、稻をひっぱりあげることではなくて、まわりの草を切る、草を取つてあげて、稻が育つということを待つことが教育なのだ、というのが孟子のたとえでした。

しかし、今、われわれは、孟子がそういうたとえによつて、二千年前に言つた愚かなことを、ぼくらは、やつてゐるよう思います。それが、シモースが言つている教育によつて、子どもが根が切られた人間になつてしまふ、根こぎにされた人間になつてしまふという第三にあげている所に、あたるわけです。

今、こういうことを述べてゐるのも、最初に言つた、romance の段階が、われわれになくなつてきてゐるということなのです。

romance の段階は、はつきり結論はつかないけれども、非常に大きな真理の前に、人間が畏敬の念をもつて立つということなんだね。そのことによつて、人間がもつてゐる、人類を受け継いできた、自分でも意識しなかつた能力が現わされてくるという状態が、romance の状態でした。いい考えが生まれてくるとか、非常にすばらしい考えがわいてくるというのは、予定してわいてくるのではない。それから、言葉もそうでしょう。何かの機会に、孟子が惻隱の心という言葉でいつたわけですが、ある一人の子どもが、今、おぼれかけている時には、何にも考へないで行動が起つるわけでしょう。ある人の前で、言葉を言う時は、その言葉は、最初に予定していなくても、無意識のうちにわき出でるものでしょう。それと同じように、いい考えも、非常に創造的な考えも、自分ではじめに予定していたのではない。

だから、アインシュタインが二十五歳の時に、特殊相対性理論というものを考へたのは、その前にちゃんと、precision の段階があり、そして、もっと子どもの時分には、磁石なんていふものを見、不思議な目で眺めていましたね。そういう子どもの時代があるわけだ。そして、一人で山の中で、バイオリンをひいて、山の静かさ、というものを味わっていたね。そういう、romance の段階があつて、それから、数学が非常にできたから、少し数学をやつたね。そして、突然、二十五歳の時、スイスで働いていた時

これは、彼が予期していたことではない。天から降ってきたことなんだ。つまり、宇宙から侵入してきたよななものだ。

考えというものは、そういうものです。どこからわいてきたかわからないものです。そういう言葉、今、それを言葉としてとらえる、えらい言葉だけども。ぼくらの日常生活だって、そうだと思うね。AIN・シユタインは、その自分の考えが、飛躍して、大きなものになってきたので、そのためには、病気にかかる、二週間ねちゃったわけです。自分の考えの大きさに驚いて、病気になるくらいのことやつてみたいよね。ところが、ちっとも病気にかかる可能性なんかは、普通の人にはないよね。テアード・シャルダンが、現代の人は、毎日のパンと、静かな詩しか考えていないのではないかといっている。人類は、かつては、そうではなかつたよね。毎日、食つて、祈れて、後は、静かに死にたい。死ということも、みんな考えなくなつちやつて、食うことしか、考えない。人間は、これでいいでしょうかね。人間であるから、何があるはずですよね。何だかわからないけれども、人間を押し上げているものがある。人間というものになつてみたいですね。キラキラしたものにね。

テアード・シャルダンの言葉で言えば、現代の人間は、三つの恐怖をもつてているということも、つまり、現代の人間は、くるべき所まで、きちゃつたわけで、あと、先どこへ行つていいかわからないわけでしょう。先、どこへ行つていいか、わからない。それ

は、皆さん、実感あるわけじゃないかな。死というのは、先にちゃんと、個人について待っているよ。死は、すべての人の終点ですよ。そのことも、あんまり考えない。現在のことを考えて、自分がことばかり主張しているね。ともかく、文明がここまで行きついてきたら。だから、月なんかは、あれは、多少刺激になりますよね。行きつく所まで、行きついてしまって、この先に、希望というものを感じるよう、ワクワクしたものはないね。来る所まで、来ちゃつたんだね。あとは、できるだけたくさんうまいものを見つけて、観光バスかなんか乗つて、方々歩いて、あの顔みてごらん、つまらない顔しているよ、あのおばあさんたち。だって、やることがないらしい。何か、停止しちゃつた、人類の歴史が、ここで停止しちゃつた感じだね。戦争もやれないんだ。ベトナムなんかは、非常に立派にみえてきますけれども、あれ、戦争しているのではないんだ。ベトナムの人は、いい顔しますよ。しかし、全般的には、退屈した状態になつてきているわけでしょう。そして、この退屈に慣れちゃつていますよね。

テアード・シャルダンは、現代人は、次の恐怖をもつてているといっている。つまり、一人の人間の人格を理解することは、もうできないという、そういう恐怖をもつてている。確かに、みんなそうではないかしら。人間は、ある機械の部分品のようにみられてますよね。ここに一人の人格があるんだ、ということを理解してもらえるという可能性を失つちゃつていますね。いろいろと、

ちがつてゐるわけですけれど、やはり一人一人の人格が理解してもらえるということが、生きてゐる喜びですよね。ところが、それがないんだな。お金を、どれだけもつてゐるか、人より、どれだけぞいたくができるか、ということが尺度になつてしまつてゐるね。

第三には、何かを、一人の人間が成し遂げた喜びをもつことができない状態になつてしまつてゐる。食つてはいるけれども、生きているということはない状態。何か、その人が、一つのことを成し遂げたという喜びによつて生きている意味がでてくるわけですよね。それが、今、ないのだと思う。

第三には、この現在、怠つてはいるけれども、生きているといふか、精神的には死んでゐるけれども、肉体的には、生存してますよね。肉体的生存が退屈だから、いろいろと、お化粧してみたり、目を黒くしてみたり、退屈しのぎに、いろいろやつてゐる。週刊誌のエロ記事を読んでみたりして、退屈をまぎらわしているわけです。

しかし、ほんどうの意味で、人類に次の出口があるのかどうかね。それは、日本人が普通使う言葉で言えば、希望という、私が、今日、どんなに貧乏でも、この希望において、貧乏は耐えられるという。現在、何にも物質的には恵まれていなくても、私は生きがいがあるということが、今の人にはありません。つまり、一人の人間として、価値を認められるということもないし、

一人の人間として、生まれてきた意味を表わすことができるよな何かを成し遂げたという喜びもないわけだよね。そして、同時に、希望がないのだ。出口がどこにあるかわからないのだ。サルトルの芝居の中にあるように、出口なしですよ。だから、生きていて、死んでいるんだ。死ぬことさえ、もうできないんだ。一度死んだ人は、またもう死ねないのですから。だから、死ぬこともできないんだ。愛することもできないんだ。そういう状態に、今いるわけだよね。

こういう状態で、いいわけはないんだ。まして、子どもたちの中に、わたしたちが個人として死んでも、日本民族は生きているはずですよね。それから、現在、生きている人間が死んでも、なお、人類というものは、あるはずですよ。人間が生きている意味を、そういうものにとらない限り、教育というものは成り立たないと思う。今日、明日の利益のために、みんな争つてゐるような教育は、真に、人間を根こぎにしてゐる教育ですよ。これは、教育というものではないのです。そういう教育が、日本全体の教育であつて、そして、そういう教育が、幼児の世界をおかしてゐるんだ。

そして、もう一つ、テアード・シャルダンが、フランスの物理学者と話をしてゐる時の話は、たいへん現代の問題をはつきりさせるために役に立つと思ひます。その二人が、原子爆弾ができた

後、物理学者と、生物学者のテアード・シャルダンと話をしてまして、人類は、これで終わるのではないかと。この間、オリビエという人の本を読んでいましたら、その中に、テアード・シャルダンの解釈もでてくるのですけれども、パリ大学の、つまり、人の進化という、（お茶の水女子大学を卒業した人が、あれを訳していました。みすず書房）本を読んでいたら、人類は、ここまでたら滅びるのではないか。もうこれで、まず一段落して。

そうしたら、いろいろと説があるんだね。紀元三〇一〇年の六月一日で滅びるとかね。ともかく、変化の仕方が、非常に早くなってしまったからね。これ滅びちゃうかもしれない。人類は、ではどういうふうに、滅びるかということ。これはうそではないんだよ。そんなこと言うけれど、滅びないだろうとぼくも前に考えたんだけれど。もし、人類が滅びるとしたら、皆さん、どういうふうに滅びると思いますか。できるだけ、今のうちに、うまいものを食べておく。それは、つまらないのではないか。できるだけ楽しんでいくという気持ちではないものになってくるんだと思う。そして、日本民族は滅びるのではないか、人類は、滅びるのではないか、と考える方が、問題がはつきりしてくると思う。ずっとうまく行くはずだ、なんて思っているから、だんだんになってしまふのだね。

そこで、テアード・シャルダンとある物理学者が話をして、物理学者は、それは、どういう状態で滅びるかといったら、それ

は、非常に熱くなつて滅びちゃうだろうと。テアード・シャルダンは、それとは違うんだ。それは、非常に冷たくなつて、滅びちゃうんじゃないかと言つた。

それは、ケネディ大統領の時に、非常に利用された、アメリカのノーベル賞をもらう候補になつて、ロバート・フロストという詩人が言つてゐるのだけれども。死んじゃいましたけれども、ケネディ大統領がロバート・フロストに頼んで、ロシアに使ひに行つてもらつたわけです。で、ケネディ大統領の演説の時に、ロバート・フロストという年とった詩人をいつしょに連れていつて、演説をしたのです。その時に、ロバート・フロストは、年とつていたし、詩の朗読をやるのを途中で、わからなくなつちやつたので、途中で、下りてきちゃつたといふ、いい人です。あれは、全部終わりまで、やつちやわないところがいい。そのロバート・フロストの詩にも、人類が滅びるといふのは、うんと熱くなつて滅びてしまうか、冷たくなつて滅びるかといふ、短い詩があります。

だから、この問題は、人ごとではないのです。何でもうまくいくというふうに、たかをくくつて考へていてるべきじゃないのだ。そして、滅びるといふことは、ぼくは、どうせ死んでいくのだから、などというわけにはいかないんだよ。ぼくというのは、やっぱり人類があつてこそいるのだから。つまり、人類の方が大きいんだから。民族の方がね。ぼくのために、人類がいるわけではな

いんだ。ぼくは、やつぱり、人類に委託されて生きているのですから。そう思わなくつちゃいけないんですよ。ぼくが、かつてに、わいてきたのではないだから。その深さにおいて、今、ここに生きているわけですからね。

物理学者が言つたのは、熱くなつて地球が滅びるということ。

それは、何か、水爆か、原爆が連続して、何発も爆発することによって、地球の水がすべて重水素に変わって、そして、全部連鎖爆発を起こせば、火星まで黒焦げになつてしまふという。そういう可能性は十分あるので、ぼくらは、科学者でないものだから、たかをくくつて生きているけれどね。科学者は、そのことをいつしょうけんめい考えている。だから、そういうふうに物質的究極の神祕までわかつてきたということは、人間にとつて、それだけ人間は、責任をもつた存在にならなければならない、ということなので、なりゆきにまかしているわけにはいかないわけです。そういう危険をはらんでいるのです。

もう一つは、テアード・シャルダンが、冷たくなつて滅びるのではないかと言つた。これは、また、非常に重要なことなのです。人間が、だんだん体温が下がつてしまつて、心に温か味がなくなつて、つまり、ここで、ホワイトヘッドが言つてゐる、*Romance* の段階で、成長しなければならない人間の精神的発酵といふものがなくなつちゃつて、つまり、心の温かさ、物を感じる心、人の悲しみさえ、自分の悲しみと感じるんだね。宇宙の大きさをみていると、その宇宙の大きさが、自分の内に宿つてゐるほど、この宇宙の大きさというものを、神祕に感じる心というものがなくなつてくることを意味しているのだね。

つまり、人間の心は、今日のような状態だと、だんだん冷たくなつてきちゃつて、つまり、神經は、だんだんたるんできちゃうんだね。この中枢の、二〇〇億もある神經が、全体として作りあげてあるこの暖かさは、物質的な熱とはちがうわけだね。人間の考える力で、あたかも肉体の中に神が宿つたごとく、愛というものが、人間の中から輝き出すわけだよね。そういうものが、だんだんなくなつてしまつて、ほんとうに冷たい状態で交渉しているわけですね。なんとなく、だるい状態になつてゐる。生きているということは、味わいを失つてくるわけです。生きてはいるのだ。しかし、何と味わいのないことが、また、危険を生み出す原因になりますよね。何が、めくらめっぽうに大きい刺激がほしいわけですよね。そういう具合に、人間が、だんだん冷たくなつてしまつ。つまり、昆虫というのは、冷たいでしょ。人間は、だんだん、昆虫に近くなつてくるんだ。外にばかり感じてゐるんだ。

内部の方で、物を感じて、内部の方に一つの世界ができあがるといふことが、なくなつてくるわけです。そして、それで、人類

は、これで終わりになるというような状態、こういう危険を現在の人ははらんでいるわけです。そして、出口のない状態でいるわけで、この状態の中で、教育というものがあるとすれば、これは策略なんで、教育という名で呼んでいいかどうかわからないと思う。やる気にならせるということが、自信をもたせることがないで、それは、人間というものになつた喜びだと思う。それが自信なんだね。

私は、どうもうまく言えませんけれど、テアード・シャルダンの言葉で、人間は、この状態から、次の状態へ変わらなければならぬ。今、ある意味では、ぼくは、創世紀の時代だといつてもいいと思うのです。人類として、次の時代に出口が見つかれない限り、人間は、滅びますからね。つまり、よどんてしまっている流れない川は、くさつていくより仕方ないわけです。ここに、流れを作らなくてはならないわけです。この流れを作るために、とりわけ、幼児教育というものによって、人類や民族に対して、責任を果たしたいというのが、ぼくの気持ちです。テアード・シャルダンは、こういうことをいつているけれども。水が冷たいからうかということを知ることが問題ではなくて、私たちは、この川を渡らなければならないんだ。つまり、人類は、オリビエという人の、人の進化で言えば、人間を越えたものにならなければならないのだね。今、人間におぼれていますよ。人間であることに、いい気になって、それに甘えているというところがありますよ。

そういう覚悟をしなければならないのです。

そして、もう一つ、テアードのことばで言えば、人間の心は、量を質に変える働きをもつてゐるものだということ。量を質に変える力をもつてゐるのが、人間の心なんだ。知識というのも、いろいろな量はあるけれども、それが、その人の内部において、質にかわることができるはずです。従つて、食物でも、その人は、カロリーだけで生きているのではなくて、その人を通じて、エネルギーがちがつた質のものになつてくる。

最後に、こういうふうにいいます。テアード・シャルダンの、愛の弁証法という、三つの周期です。これと、教育のリズムとを繋係させて、考えてみようと思っていたわけです。同時に、構造主義の巨匠である、レヴィ・ストロースの、野性の思考というもののとの関係を考えてみようと思つたのだけれども、これはむずかしいから、宿題にしておきます。

テアード・シャルダンの弁証法で、あらゆるものを作り出していくわけですが、物質も、人間も、宇宙の進化も、包み込んでいるわけですけれども。同時に、これは、教育の三つのリズムだと考えていいと思います。

最初の divergence というのは、一人一人が違つていて、といふことです。これが、ピアジェの自己中心ということ、あるいはお駄廻きますが、生まれた時に言つたという、天上天下唯我独尊と

こうこととも、関係をして考へてもいいと思うのです。この人は、世界に一人しかいない。赤ん坊もそうです。この世に生まれて一人しかいない。それが、divergence の状態だ。これは、一人一人が、みんな別個のものなんだ。それが convergence の状態になる。それが、他の人を知り、この世界を知るわけだよね。まわりのいろいろなことを知るわけだよ。そして、その人が分化していくわけですよ。一粒の麦が、芽が生えてくるように分化していくわけです。

そして、emergence というのは、新しいものが現われてくるということなのです。これは、愛の弁証法という、非常に大きなもので、物質の構成から、土地の発酵から、人間の考える力が生まれてくることまで含んでいる一つの原則なのです。私たちの現在の教育は、全く無原則で、何かその場ぎりのことばかりやっているわけですね。何か、今やっている教育に、一つの、明治時代の言葉で言えば、世界のどこへ行つても、これは、間違っているという原則の上に立ちたいと思いますよね。そうでなければ、ぼくらがやつていることの意味によつて、われわれが慰められることができないわけですよ。たえず不安で、せかせかと、間違つたことをやりかねない状態です。

この divergence と convergence、つまり、一人の人間は、ずっと、どういう経験をしても、どんな保母さんといつしょになつて、その保母さんとの心の交わりによつて、この子は、変わりま

すけれども、それから、自然の美が、わかれればわかるほど、この子どもの心は変わりますけれども、しかし、この子は、ちがつてしまつたわけではない。一つの人格ですよね。そして、いろいろなことがわかつてくることによって、この一つの人格は分化して、この一つの人格は、違つたものになってくるわけです。テアード・シャルダンは、それを、イエスの二つのような姿で、人類の未来を考えるわけです。

この現在の人間が、ほんとうに愛の力によつて、converge していくといふ、つまり、質のちがつた人間になつていく。そして、もとの人間と、ちがつてしまつたわけではないんだね。そして、その後に、emergence というのは、一つの、予期もしなかつたものが、現われるということだけよ。人間の能力だつてそうです。人間の人柄、人格ね。一つの人間がもつてゐる魅力というのも、それは予定して、できているものではないね。個々の、ちがつた人間がいて、この人たちがいつしょにいて、そして、愛といふものによつて、converge するんだね。質が変わつてくるのだけね。そして、今まで、予期もしなかつたものが、現われてくる。予想もしなかつた能力が生まれてくるという喜びが、教育という仕事なのだと思ひます。で、テアードの、プリンシブルは、物質の構造も、生命の発生も、人間の変化も、つまり、変化というものに、一つの道筋を与えているのが教育なのです。船をとつてゐるのが教育なの

です。

そういう意味で、ヘーゲルの、テーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼなどという、ああいう観念的なものでなくて、きわめて科学的な弁証法が、アーティストの愛の弁証法です。愛というと、何か、男と女の愛ばかり考えるかもしれないけれど、そればかりが愛じゃないのです。愛というのは、物を作っていく力をもっているわけだよね。こういう原則に立って、幼児教育というものを見直さなければいけない。

そういう意味で、私は、最初に、園長になつて、まことにしながら、いろいろなことを考えて、ちつともまだ形を成しませんけれどもね。しかし、私は、孤独な夢想家として、大学の教授をしていただけれども、そして、今もやっているけれども、私のように間に合わない人が、ここに園長になつたということは、何か意味があつてのことだろうと、こう考えて、何か、ひとつやらなければならぬと思ってる。私は、一人ではやれませんから、ここに先生たちはもちろんけれども、あなた方といっしょに、そのconvergeする状態になりたいと思う。そういうお願ひを述べて、私の話を終わりたいと思います。

(一九六九年七月二十三日、お茶の水女子大学・日

本幼稚園協会主催・幼児教育講習会の講演より)

(文責・編集部)

### ● 幼児の心理的発達

山下俊郎著

A5判290頁  
定価800円  
〒900円

幼児の心についての科学的知識を養うために乳児から五歳までの年齢段階別幼児の心理発達をわかりやすく解説

### ● 幼児の行動の評価にあたつて

書

図

参考

月

参

今

### ●指導記録の参考例として

## 幼児の生活と教育

海 卓子著

A5判350頁  
定価450円  
〒900円

長年の保育経験から生み出されたユニークな幼児教育論  
集団生活を根底とした数々の指導記録及び指導の觀点を  
含む。

フレーベル館発行